

英語の二重目的語構文と与格構文に関する 一考察

高橋直子

1. はじめに

英語における与格構文とは、(1a) や (2a) のような直接目的語と to や for を含んだ前置詞句を伴う構文のことをいう。また、二重目的語構文とは、(1b) や (2b) に示されるような動詞句の中に直接目的語と間接目的語の2つの目的語を持つ構文である。そして、(1a) のような与格構文は、to-与格構文、(2a) のような与格構文は for-与格構文として呼ばれている。¹

- (1) a. John gave a book to Mary.
b. John gave Mary a book.
- (2) a. John bought a book for Mary.
b. John bought Mary a book.

二重目的語構文と与格構文との交替（「与格交替」*dative alternation* と呼ばれている）に関する研究は長年に渡って行われてきた（Larson, R. (1988)、Baker (1988)、Gropen, Jess *et al.* (1989)などを参照）。本研究では、与格交替に出現する動詞に関する制約と、個々の動詞の取り扱いについての問題点を検証する。そして与格交替において、動詞とそれらの動詞が表す事象がどのような意味構造を持っているかを、語彙意味論の視点から考察していく。

まず第2節では、先行研究のひとつとして、久野・高見（2005）における二重目的語構文と与格構文の交替に出現する動詞の種類を述べる。また、情報構造に基づいて久野・高見が与格交替の動詞と共起する名詞句を

どのように説明しているか検証をする。

続く第3節では、同じく先行研究として岸本（2001）がどのように与格交替に関する制約を分析しているかを観察する。第4節では、第2節で述べた久野・高見が挙げている give 型動詞の内、3つの動詞を対象にして、既出の議論を参考にしながら個々の動詞を具体的に考察していく。第5節では同様に、buy 型動詞の中の2つの動詞に関しての問題点を挙げる。そして第6節では本研究の結論を述べる。

2. 久野・高見（2005）の分析

この節では久野・高見がどのように二重目的語について分析しているか観察していく。まず、与格交替に関わる動詞は、give 型と buy 型の2種類に分けられていること、そしてその2種類の動詞群の特徴を説明する。次に与格交替と情報構造の関わりについて久野・高見の分析を紹介する。

2.1 二項動詞か三項動詞か

久野・高見（2005）によれば、二重目的語構文と与格構文に出現する動詞は「二項動詞」あるいは「三項動詞」として認識できるとしている。項というのは、動詞が導く統語的な役割と意味とによって構文成立に必要とされる名詞句のことを示す。具体的には、動詞が必要とする主語、目的語、あるいは前置詞句内の前置詞の目的語が項として存在する。上記の(1)と(2)の例では、名詞句である John、Mary、そして a book が項である。

英語学習では一般的に、(1)のような交替をする動詞は give 型、(2)のような交替をする動詞は buy 型と呼ばれ、構文が二重目的語構文から与格構文に書き替える場合に、to か for のどちらかを選ぶか覚えることを強いられるが、久野・高見（2005）によると、これらの動詞は基本的な意味が異なるために異なる前置詞を選択するので、動詞の基本的な意味を理解すれば、それぞれの動詞が to か for のどちらかを選ぶかを盲目的に暗記する必要はないとしている。そして、両タイプの動詞はどのような点で異なるか以下のように分析している。

まず久野・高見は、give型、つまりto-与格構文に出現する動詞を、ある対象物(Z)を人(X)が誰か(Y)に移動させることを表す「対象物移動動詞」と分析している。例えば、give型の動詞であるgive, lend, pass, pay, sell, send, mail, throw, tell, bring, take, carryなどの動詞が示唆する事象を考えてみると、どの動詞もある人が何かを誰かに移動させるようにしている。そしてgive型の動詞はこれら3つの要素、つまり対象物(Z)、人(X)、そして誰か(Y)を指し示す名詞句を必要とする動詞であり、このような動詞を「三項動詞」と呼んでいる。そして、ある対象物(Z)が(X)から(Y)へ移動することを表し、(Y)が対象物の移動先になるので前置詞toを選択すると論じている。

一方、make, build, cook, buy, getなどのbuy型の動詞、つまりfor-与格構文に出現する動詞は、ある人(X)がある行為を行うことを示す「行為動詞」として、上記の3つの要素の内の誰か(Y)を必ずしも必要とせず(3)が示すように、主語と目的語だけで適格な文として成立できるとしている。

- (3) a. John bought a bag.
 b. John cooked fish.
 c. John built a house. (久野・高見 2005:117)

従って、give型の動詞が「三項動詞」であるのに対し、buy型の動詞は「二項動詞」と呼ばれている。しかしながら、一般社会では、例えば、ある人が鞆を買うことが、自分のためだけでなく誰か人にあげるためであったりする場合がある。その場合は受益者はforで表され、前置詞forを取るとしている。

久野と高見(2005:115)は以上の議論を(4)と(5)のようにまとめている。また(6)には久野・高見(2005:115)によるgive型動詞、buy型動詞のそれぞれの例を示した。

- (4) give型動詞 = 三項動詞 = 前置詞toを選択する構文
 = 対象物移動動詞

- a. OK John gave Mary a book.
 - b. OK John gave a book to Mary.
 - c. * John gave to Mary.
 - d. * John gave a book.
- (5) buy型動詞 = 二項動詞 = 前置詞 for を選択する構文
= 行為動詞

- a. OK John bought a Mary a book.
- b. OK John bought a book.
- c. OK John bought a book for Mary.

(6) A: give型動詞

- a. 授与動詞 give, lend, pass, pay, sell, serve, lease, …
- b. 送付動詞 send, mail, ship, forward, post, …
- c. 投与動詞 throw, pitch, hurl, kick, toss, …
- d. 伝達動詞 tell, read, write, telephone, teach, …
- e. 運搬動詞 bring, take, carry, drag, …
- f. 将来の所有動詞 promise, assign, leave, …

B: buy型動詞

- a. 創造動詞 make, build, cook, knit, bake, fix, pour, sew, arrange, …
- b. 獲得動詞 buy, get, find, steal, order, catch, earn, grab, fetch, gain, pick, …

上記の久野・高見（2005）による分析は、二重目的語構文に出現する動詞を異なった2つの与格構文に表れる動詞として区分し、その相違を一見うまく説明しているようには見える。しかしながら、実際にはこのように三項動詞と二項動詞は単純に分類できるというわけではなく、この分類に関して幾つかの問題点が観察できる。以下の第4節と第5節では、give型動詞とbuy型動詞の中からいくつか具体的な動詞の例を挙げて、それらの動詞が表す事象について考察していくことにする。

2.2 与格交替と情報構造

久野・高見（2005）は、談話において聞き手が知っている情報を旧情報（old information）、聞き手が知らない情報を新情報（new information）とし、談話においては、通常、旧情報から新情報へと情報が移行するとしている（福地 1985 も参照）。この情報構造の制約は、与格交替の成立に深く関与している場合がある。その情報構造に関して、以下の久野・高見の分析を紹介しておく。

(7) a. John gave the book to a girl.

旧情報 新情報

b. ?? John gave a girl the book.

新情報 旧情報 (久野・高見 2005:103)

上記の (7) の例では、to を用いた文は適格だが二重目的語構文は不適格になっている。この理由は、「(7a) では the book は定冠詞を伴った名詞句で、the book が先行文脈において「ジョンが与えた」という動作の対象物になっており、聞き手はその本を旧情報として伝達されているからだ」と述べている。一方、「a girl という不定冠詞を伴った名詞句は、話し手が新たに加える知識であり、聞き手がその指示対象を認識していないので、先行文脈で女の子のことはまだ了解済みではないと解釈できる」としている。

そうした解釈を踏まえると、情報が旧情報から新情報に流れている (7a) の文は、情報の流れに沿っており適格であるが、(7b) の文では新情報から旧情報へと情報が流れており、情報の流れに反している。そのために (7b) の文は適格ではないと久野・高見は述べている。

一方、以下の (8) の例では、(8a) では新情報から旧情報、(8b) の例では旧情報から新情報へと情報が流れている違いがあるのに、(8a) は適格な文となるとしている。それは何故だろうか。

(8) a. John gave a book to the girl.

新情報 旧情報

b. John gave the girl a book.

旧情報 新情報

(久野・高見 2005:104)

まず久野・高見は、「与格交替においては、与格構文つまり to/for を伴う文が基本形で、二重目的語構文とは情報の流れに合わせるために、基本形の語順を配列し直した構文である」としている。そして「ある人が誰かに何かをあげたことを述べる場合、基本形、つまり与格構文を話し手が用いると、新情報／旧情報に関わり無く、渡した物を直接目的語の位置に置き、渡した相手を to~ の位置に置かなくてはならない。よって (8a) は (8b) を配列し直した文であり、(8a) は情報の流れに反していても、それは話し手が意図的に違反したものではないので適格になる」と述べている。

このように、与格交替の可能性は動詞と前置詞の関係だけでなく、情報構造が重要な要因にもなる場合があると久野・高見は主張している。

3. 岸本 (2001) による分析：意味的制約と談話情報の制約

先行研究のひとつとして、岸本 (2001) は、意味的制約、形態的制約、音韻的制約、談話情報の制約、統語的な制約など、英語と日本語の与格交替においてどのような制約があるのか詳細に説明している。その中の、英語の与格交替における意味的制約と談話情報の制約について、以下で観察していくことにする。

まず、岸本 (2001) は、与格構文から二重目的語構文への交替に関して、『与格構文が二重目的語構文と交替するためには「所有関係の発生 (HAVE 関係が成立する)」ことが含意されなければならない (他に Green 1974, Oehrle 1976, Pinker 1989, Gropen *et al.* 1989, Goldberg 1989, 1992 など参照)』という制約について以下のように議論している。

- (9) 二重目的語構文と与格構文の交替の可能性は、間接目的語として、いわゆる着点をとるか、受益者をとるかによって変わってくる。二重目的語構文と与格構文は、自由に交替が許されているわけではなく、動詞が「移動」と「所有の発生」との両方の意味を表すことができる場合に、この交替が許される。したがって、「所有の発生」あるいは「移動」の片方の意味し

(岸本 2001:138)

岸本によると、(12)では移動させるという行為によって、相手が物を所有するという結果状態が生み出されることを表しているとする。一方、(13)では、動詞が表す行為によって、何かが創り出されるという「形成」の意味を持っているとする。

このように、to-与格構文もfor-与格構文も「結果状態」としては、O₁がO₂を「所有」するとしているが、「行為」としてはto-与格構文は「移動」、for-与格構文は「作成行為」の意味を重視しているのである。

上記の「所有関係の発生」の制約以外に、次のような意味的制約を岸本は挙げている。そのいくつかを以下に挙げておく。

第一に、間接目的語が有生名詞（生き物）でなくてはならない。

(14) a. John took the letter to Mary.

b. *John took the mail box the letter. (岸本 2001:134)

第二に、二重目的語構文しか許さない動詞がある。この制約では、許諾・剥奪の意味を表すforgive、costなどの動詞が使われる。岸本は(15)に示すようにforgiveなどの動詞は間接目的語にある種の権利を許すという「所有の発生」の意味を表わすが、その権利は主語から間接目的語へ移動するわけではないため、to-与格構文は成り立たないとしている。

(15) a. John forgave Mary her debts.

b. *John forgave her debts to Mary. (岸本 2001:135)

第三に、主語が無生物主語の場合、主語から間接目的語に物の物理的移動がないので与格構文は許されないが、物の移動より「所有」という結果状態に重きを置く場合は、主語が無生物であっても二重目的語構文は成立している。(以下の(18b)では、メアリーがジョンにアイデアを与えたという解釈のほか、メアリーの行為や振る舞いが原因(きっかけ)となってジョンにアイディがひらめいたという解釈が可能であるため、両方の文が適格となる。)

- (16) a. *Lipson's textbook taught Russian to me.
 b. Lipson's textbook taught me Russian. (岸本 2001:136)
- (17) a. *Mary's behavior gave an idea to John.
 b. Mary's behavior gave John an idea. (岸本 2001:136)
- (18) a. Mary gave an idea to John.
 b. Mary gave John an idea. (岸本 2001:136)

第四にイディオムの表現は二重目的語構文しか取れない。

- (19) a. Give me a hand.
 b. He gave me his cold. (岸本 2001:136)

第五に、軽動詞構文では主語から間接目的語への「転移」を含意しないために与格構文は不可能である。

- (20) a. John gave Mary a kick.
 b. *John gave a kick to Mary. (岸本 2001:137)

また、岸本は談話情報の制約についても分析しており、以下の2つの代名詞に関する分析を挙げておく。まず、与格交替における直接目的語が代名詞の場合、多くは二重目的語構文を容認しない。

- (21) a. *John gave Bill it.
 b. *The commissioner gave the team him. (岸本 2001:141)

一方、二重目的語構文において、直接目的語が人称代名詞でなく、thatの様な指示代名詞やoneのような不定代名詞の場合は容認される。また、代名詞の制約は与格構文で現れない。

- (22) a. John gave Mary {that/one}.
 b. John gave it to Mary.
 c. The commissioner gave him to the team. (岸本 2001:142)

以上のように、岸本は与格交替に関しての意味的制約、談話情報の制約に基づいた分析を紹介している。以下では上記の久野・高見(2005)の分析と岸本(2001)分析を踏まえながら、give型動詞とbuy型動詞の中の注意すべき動詞の扱いを第4節と第5節で見えていくことにする。

4. give型動詞

4.1 伝達動詞

まず、give型の動詞の内、いくつかの伝達動詞を観察してみよう。上記の分類では、伝達動詞は対象物移動動詞であり三項動詞に属するとするが、伝達動詞の内、行為動詞である二項動詞としても表現される例が見られる。まず write について考えてみよう。

- (23) a. John wrote Mary a letter.
b. John wrote a letter to Mary.
c. John wrote a book.
- (24) a. John wrote a letter to Mary.
b. John wrote a letter for Mary.

上記の (23a) と (23b) では、岸本 (2001) が分析しているように、与格交替を伴いメアリーと手紙の間に所有関係が生じている。

一方、(23a)、(23b)、(23c) とを比較した場合、write は三項動詞にも二項動詞にもなる。二項動詞の場合の write は、「(書物などを) 書く」という行為であって、そこには対象物の移動は伴わない。

また、英語の母語話者によると、(24a) と (24b) のどちらの文も文法的に適格であるとしている。そしてその違いは、(24a) は「ジョンはメアリー宛に送るために手紙を書いた」という意味であるが、(24b) では「メアリー宛に書いたかもしれないが、メアリーが何かの利益を得るために、(例えば推薦状など、別の人に書類を読んでもらうために)ジョンが手紙を書いた」と解釈できるとしている。つまり、(24b) は、例えば (24b') のように書き替えられるとも言えよう。²

- (24) b'. John wrote a letter (to the professor) for Mary.

(24b')の例を見ると、やはり write は二項動詞というより、寧ろ対象物移動動詞である三項動詞に属すると結論付けられるかもしれない。しかしながら、(25)の例から、やはり行為動詞としての二項動詞としても成立できると言える。(25)では、本という対象物が、メアリーや誰か他の人物に移

動する必要はない。

(25) John wrote a book for Mary.

この観察から、動詞の write が表す事象に関して考えられることは、一般的に「書く」という行為の対象物が「手紙」であれば、誰かが手紙を書き、その手紙が受取手に移動し受け取ってもらうという移動を伴う行為になるが、「本」などを執筆した場合には、本の移動が起こったり受取手が必要となるとは限らない。つまり、対象物の移動を伴えば、write は対象物移動動詞としての三項動詞になり、対象物の移動を伴わない事象であれば、行為動詞としての二項動詞として成立すると考えられる。

次に read の例を見てみよう。

(26) a. John read a story to Mary.

b. John read Mary a story.

(27) John read a story.

(26) では「ジョンがメアリーに物語を読み聞かせた」という知識を伝達し、与格交替の成立によってメアリーが知識を所有したという解釈ができるが、(27) の例にあるように、「自分で読書した」「自分で物語を読んで理解した」という意味になれば、読み聞かせる対象や物語の知識の移動が必要ではなくなり、二項動詞として解釈できる。勿論、read も write と同じように、対象物は何か、あるいはどのような事象になるかで、三項動詞なのか二項動詞なのか、その振る舞いが異ってくると言える。

(28) a. John read a story for Mary.

b. John read a story (to us) for Mary.

上記の for を伴った前置詞句のみを持つ (28a) は文法的に成立する。それは何故だろうか。(28b) のような「メアリーが何か利益を得るための行為 (例えば、本当ならメアリーが読むはずだったところを、代理としてジョンが私達に物語を読み聞かせてくれた)」という事象なら、read は対象物移動動詞としての三項動詞であると言える。しかし、(28a) では「メアリーが何かで忙しそうにしている、迷惑をかけたくなかったので、ジョン

は自分の部屋で読書にふけていた」という事象なら、読み聞かせる対象が存在する必要はなく、readは二項動詞である行為動詞に属すると言える。また、その場合にはメアリーと物語の間に所有関係も起こらない。

最後に伝達動詞のひとつである sing を検討してしてみよう。

- (29) a. John sang a song to Mary.
b. John sang a song for Mary.

英語の母語話者によれば、(29a)ではジョンがメアリーを目の前にして、メアリーに対して歌を歌ったという解釈ができるが、(29b)ではメアリーがその場に存在していなくても、ジョンが何らかの形でメアリーに利益があるように歌を歌ったとしたら、(29b)は文として容認できるとする。そして、もしメアリーに対して歌を歌い、それがメアリーに与えた物として解釈されるなら、二重目的語構文の形になる。

- (29) a'. John sang Mary a song.

以上、観察してきたように、「伝達動詞に属する三項動詞であっても、対象物の移動を伴わない時には行為動詞としての二項動詞として分析できる」ということが結論付けられる。

4.2 将来の所有動詞

次に、「将来の所有動詞」の内、3つの動詞を見てみることにする。将来の所有動詞である promise と assign は、以下の例に示すように、受取手あるいは対象になる物の存在は確認はできるが、行為それ自体が抽象的であり、ある種の概念的な対象物の移動を伴っている対象物移動の事象だと理解することは容易ではない。

- (30) a. ?John promised the money to me.
b. John promised me the money.
(31) a. My teacher assigned three books to me to read.
b. My teacher assigned me three books to read.

英語の母語話者によると、(30a)は完全に不適格な文ではないが、文と

して座りが悪いという。これは、上記の岸本（2001）による意味的制約に関する（15）のforgiveの例で示したように、許諾・剥奪の意味を表す動詞が二重目的語構文しか許さない例と、近い関係を示しているためだと考えられる。つまり（30）では、間接目的語である「お金」を約束するという「所有の発生」を表すが、その約束は主語から間接目的語へ移動するわけではないので、to-与格構文は座りが悪いという判断になると推測できる。

また、同じ「将来の所有動詞」であるleaveに関しても、give型の三項動詞／対象物移動動詞になるのか、buy型の二項動詞／行為動詞になるのかの判断が難しい。以下の例に示すように、leaveは「(手をつけないで、あるいは結果として)物を残す」という意味を持つ場合があるが、以下のように二重目的語構文からtoとforを含む与格構文のどちらにも交替できる。

- (32) a. My father left us a large fortune.
b. My father left a large fortune to us.
- (33) a. My mother left me some of that cake.
b. My mother left some of that cake for me.
c. ?My mother left some of that cake to me.

(32b)と(33b)においては、前置詞のtoもforも「行為者(対象)に対して」「行為や(対象)の為に」という意味になる。英語の母語話者によると、(32a)、(32b)、(33a)、そして(33b)は文法的に問題もなく事象が解釈できるが、(33c)は座りが悪いという。では、(32a)と(33a)の二重目的語構文から、(32b)と(33b)の与格構文に、それぞれが交替できるとすれば、その違いはどこから生じるのだろうか。

ここでの可能な分析の一つは、「どのような移動の相手、そしてどのような対象物を持っているかによって、文が適格かどうか決定できる」ということが挙げられる。(32)の与格交替の例では、leaveは「移動」の意味を強く伴い、財産が残される時、必ず移動する相手が必要になっており、移動の強い意味が確認できる。

一方(33)では、leaveの意味解釈は、「ケーキを残しておいてくれた」と

いう行為動詞としての振る舞いが強く、移動して受け取る相手を必ずしも必要とはしないため、(33c) のような to-与格構文が成立できないと考えられる。

つまり (32) の構文では、事象が移動先を明確に伴い、移動を示唆することにより leave が三項動詞／対象物移動動詞として表現されているのに対して、(33) の構文では、事象が移動を示すというよりは、寧ろ行為動詞としての受益者の存在を示唆しているため、この場合の leave は二項動詞／行為動詞として解釈されることになると分析できる。

5. buy型動詞

5.1 創造動詞

次に、久野・高見 (2005) において二項動詞／行為動詞とされている buy 型動詞の内、2つの動詞を検証していく。まず、創造動詞の pour を考えてみよう。

以下の例が示すように、pour は (34) での「注いであげる」という意味の他に、(35) にあるような単純に「注ぐ」という意味も持つ。この意味の違いについて、岸本 (2001:132) は「pour という動詞は、位置変化が所有関係の転移を含意するものと、目的語名詞の物理的な位置変化だけを表すものが存在する」と述べている。以下の (34) は前者を、(35) は後者を表す事象である。

- (34) a. John poured me a cup of tea.
b. John poured a cup of tea for me.
- (35) John poured water into the tank.

第3節の岸本の分析で観察したように、(34) の二重目的語と与格構文の交替の例は、「位置変化だけでなく、相手の所有物になることが想定される場合には、二重目的語が成立する。」という事象を表している。一方、以下の (36) の例が表すように、物理的移動のみを表す場合は、与格構文は二重目的語構文と交替することができない。

- (36) a. *Mother poured the glass milk.
 b. Mother poured milk into the glass. (岸本 2005:132)

このように、pourは久野・高見(2005)においては、buy型動詞とされているが、与格構文と二重目的語構文への交替は常に成立するのではなく、(34)で示しているように、直接目的語と間接目的語の間で所有関係が成り立たないと与格交替が行われない。また、(35)や(36)のように物理的移動のみを表す場合は、二重目的語構文にはならず与格交替を許さない。

5.2 獲得動詞

fetchという動詞は「行って取って来る」「行って連れて来る」「行って呼んで来る」という獲得の意味を持つ動詞である。以下の(37a)と(37b)の与格交替の可能な例では、名詞句のMaryとa chairとの間に所有関係の発生が含意されている。

- (37) a. John fetched Mary a chair.
 b. John fetched a chair for Mary.

一方、(38)のように実際は明確に対象物の移動を表現できることもある。また

- (38) John fetched some water from the well.

(38)で示されるように、fetchは、“go and get”という意味で、明確な移動を伴う。また、大江(1982)は、fetchという動詞について「行って取ってくる／連れてくる」だけでなく「来て取って行く／来て連れていく」という両方の意味が含まれていると主張している。その例としてGraham Greeneという文学作品から以下の内容を大江は引用している。

- (39) …it wasn't really interested in Philip, but it pretended to be, it wrote the address down and sent a constable to fetch a glass of milk.

“Your home’s on the telephone, I suppose,” Justice said. “We’ll ring them up and say you are safe. They’ll fetch you very soon…” —Graham Greene.

(大江 1982:204)

大江は一つ目の fetch は go to fetch に置き換えられ、2つ目の fetch は come to fetch に置き換えられると述べている。この例から分かるように、fetch は移動を示唆する動詞であるため、意味からは対象物移動動詞と行為動詞の中間に位置しているとも考えられる。

しかしながら fetch という動詞は、give 型動詞のように間接目的語が移動を伴った着点を示唆するのではなく、結果的に誰かが何か物を獲得してくるという受益者の存在、そして行為そのものに意味の重点があるとも分析できる。それゆえ、(40) の文は文法的でない判断される。

(40) * John fetched a chair to Mary.

このように、buy 型動詞の中のいくつかの動詞も、二重目的語構文と for-与格構文の間の与格交替が自由に行われるわけではなく、それぞれの意味構造の制約や他の制約があり、与格交替、あるいは与格構文そのものが成立しない場合がある。

6. まとめ

本研究では、与格交替に出現する動詞の種類、そして与格交替と情報構造の関係、また与格交替に関する意味的制約や談話情報構造における制約を観察してきた。また、久野・高見（2005）で示された、give 型動詞と buy 型動詞の中のいくつかを取り上げ、それらの動詞を扱う上での問題点を挙げてきた。

一般的には、give 型動詞は三項動詞／対象物移動動詞、buy 型動詞は二項動詞／行為動詞として分析できるが、個々の動詞を深く観察すると、give 型動詞の中に入っている、ある種の制約により buy 型動詞と同じ文法性を持つ動詞がある。また同様に、buy 型動詞であっても、与格交替が成立する場合と成立しない場合がある。

結論として、我々はこの二重目的語構文や与格構文に表れる動詞が、give 型動詞あるいは buy 型動詞として単純に分けられるのではないこと、そしていくつかの制約によりこれらの動詞による与格交替が常に成立するので

はないことに注目し、個々の動詞が表わす事象をさらに注意深く観察していく必要がある。

注

1. 与格交替には他に、二重目的語構文と of を伴う前置詞句を含んだ与格構文との交替があるが、of を伴う動詞は例外的としている（岸本 2001:129）。

2. 項の省略に関しては、岸本（2001:149-150）は以下のような幾つかの例を挙げて分析している。どのような項が省略されているかによって、三項動詞になるのか、二項動詞になるのかが決まされるため、省略されている項を注意して観察する必要がある。

(i) 二重目的語構文に表れる直接目的語・間接目的語はしばしば省略することができる。

a. John sang a song to Mary.

b. John sang Mary a song.

c. John sang a song.

d. * John sang Mary.

(ii) write は、着点を表す間接目的語も、移動物を表す直接目的語も随意的である（Pesetsky 1995, Dowty 1976）。

a. John wrote a letter to Mary.

b. John wrote Mary a letter.

c. John wrote a letter.

d. John wrote (to) Mary. (アメリカ英語では省略可)

e. John wrote.

(iii) feed の場合は、移動物を表す直接目的語は省略できるが、着点を表す間接目的語は義務的である。

a. John fed the cow some hay.

b. John fed some hay to the cow.

c. John fed the cow.

d. * John fed some hay.

e. * John fed (last week).

参考文献

- Baker, Mark. 1988. *Incorporation: A theory of grammatical function changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Dowty, David. 1979. Dative “movement” and Thomason’s extensions of Montague grammar. In *Linguistics, philosophy and Montague grammar*, ed. Steven Davis and Marianne Mithun, 153-222. Austin: University of Texas Press.
- 福地肇. 1985. 『談話の構造』(新英文法選書第10巻)大修館.
- Goldberg, Adele. 1989. A unified account of the semantics of the English ditransitives. *BLS* 15. 36-78.
- Goldberg, Adele. 1992. The inherent semantics of argument structure: The case of the English ditransitive construction. *Cognitive Linguistics* 2. 37-74.
- Green, Georgia. 1974. *Semantics and syntactic regularity*. Bloomington: Indiana University Press.
- Gropen, Jess et al. 1989. The learnability and acquisition of the English dative alternation. *Language* 65. 203-257.
- 岸本秀樹. 2001. 「第5章 二重目的語構文」影山太郎(編)『動詞の意味と構文』127-153. 大修館.
- 久野暲・高見健一. 2005. 『謎解きの英文法 文の意味』くろしお出版.
- Larson, Richard. 1988. On the double object construction. *Linguistic Inquiry* 19. 335-391.
- Oehrle, Richard. 1976. *The grammatical status of the English dative alternation*. Ph.D. dissertation, MIT.
- 大江三郎. 1982. 『講座・学校英文法の基礎 第4巻 動詞 (I)』研究社.
- 奥野忠徳. 1989. 『変形文法による英語の分析』(現代の英語学シリーズ9) 開拓社.
- Pesetsky, David. 1995. *Zero syntax: Experiencers and cascades*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Pinker, Steven. 1989. *Learnability and cognition: The acquisition of argument structure*. Cambridge, MA: MIT Press.